

Title	亞米利加で觀た唐鏡の三四に就いて
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.55(587)- 69(601)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

亞米利加で觀た唐鏡の三四に就いて

—

其の華麗と自由な配布とから圖様の著しく繪畫的となつた唐鏡は、よしそれが考古學の研究上に與ふる學的興趣に於いて漢式鏡に及ばないものがあるとしても、また一つの美しい工藝品として愛好に値すべきことは言を須ひざるところである。而して此の唐代が支那に於いて優れた技巧をあらゆる工藝美術の上に發揮した時代であることに依つて、小さな鏡背文にそれが如何に表はれたかを見ることがまた興味が多い考察の一題目となり得るのであらう。奈良の正倉院の寶庫に藏せられてゐる多數の實例に依つて、吾々は唐代に漢鏡に見る單なる鑄出し文の外に、平脫、螺鈿、七寶、貼金銀等の種々な技術を鏡の上に應用して多大の効果を收めてゐるのを如實に教へられた事であるが、是等の多くは從來の支那の著錄から佚した類なので、爲に嘗ては其の類を以て奈良朝に於ける邦人の製作とする論者をさへ見たのであつた。多數の正倉院の御物鏡のうちに内地で作られたと覺しいものを含むことは種々の點から考へられる處ではあるが、如上の特徴ある鏡背文を持つ遺品の大部分の彼地からの舶載品なる可きは、唐代の

文献から推し得るのみならず、近時支那から新たに同じ種類の遺品が續出して内地並に歐米に齎される事になつて立派に證明せられた。そうして是等の新資料は單に如上の點に役立つのみでなく、種々の類を含んで、其の或もの、起源の唐代よりも遡るべきを推知せしめると共に、中に正倉院に見ない新しい技巧を示した遺品をも含むことは、注意に値する事實と云はなければならぬ。

此の種の支那出土の唐鏡の精品の我が國に齎されたもの固より其の數が少くない。中で兵庫縣の嘉納治兵衛氏の收藏品の如きは多くの優れた遺寶を含んでゐる。即ち氏が二十餘年前手に入れた雙禽文の螺鈿鏡の如き、形は小さいが同式鏡の支那出土品の最初の記録をなすものとして兼て雙禽の刻法に見るべき點を示すのははじめ、同じく螺鈿鏡の大形品、洛陽呂家廟村出土の徑八寸三分ある金銀平脫鳳凰飛禽花枝鏡、草華文飾りの殆んど修補のない金銀平脫文の大きな鏡、洛陽北離城十里馬溝邨山出土と傳ふる徑七寸の貼銀背の鏡等は其の著しい二三の例として擧げらる可く、是等はいづれも近く刊行の氏の『白鶴帖』を飾るものなのである。さう乍ら由來唐鏡は其の圖様の華麗な點から歐米人士の趣好に投ずるものがあつて、同じ類の歐米に齎されるものが夥しく、中に珍貴な遺品の存在を見受ける。私は嘗て『佛教美術』誌上に滯歐中英佛で觀た四五の平脫、螺鈿、象嵌文の唐鏡を紹介した事であつたが(同誌第十一冊所載拙稿「歐洲に齎された二三の唐鏡に就いて」参照)亞米利加に渡つて博物館並に個人の支那收藏品を囑目する機會を持つに及んで、前者に倍した唐鏡の佳品の存在を注意した。而して其の或ものは從來他に類例を見ない

ものなのであつた。でいまこゝに右の『佛教美術』の小編の首尾を全くする爲に其等のうちの著しい四五を録して海外に齎された唐代工藝美術の一端を傳へることにする。

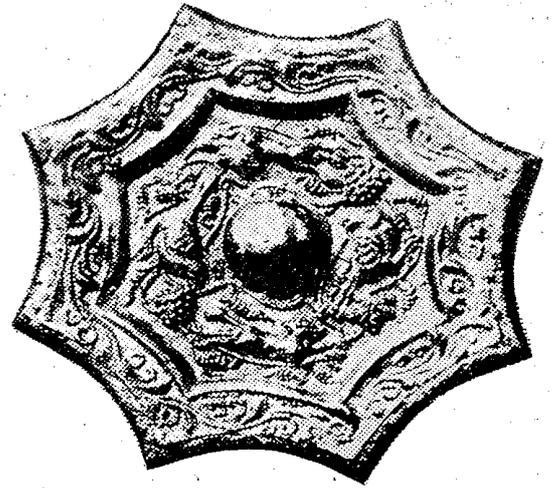
二

さて亞米利加に齎された唐鏡で私の矚目したうち、技巧の上から先づ記す可きものは其の鏡背に金銀を貼して裝飾とした類である。これに屬する鏡は六七年前河南省洛陽郊外蟒山郡馬坡出土品が我が國に將來せられて住友男爵の有に歸し其の『泉屋清賞』の續編(圖版百二十五參照)に收められて世の注意を惹いたが、其の後支那に於ける此の種の類品の出土相嗣ぎ、内地の外に歐米にも傳へられて、うちに精品を含むこと、平脱文鏡に優るものがある。昨秋東洋に來游した費府大學博物館のフアナルド女史(Miss. Helen E. Fernald)が上海で獲て帶歸した徑六寸一分の八稜の貼銀鏡で海獸葡萄華文を以て鏡背を飾つたのは此の類の佳品であるし、又同じ頃山中商會の紐育支店員の手に入つた一面は徑八寸の八花鏡で、貼銀の背文は内區に飛雲に乗る双鸞があり外區には花枝に狻猊寶馬を配して、その主圖様に鍍金を加へたもの、圖様は共に唐鏡に通有のものながら、技巧の優秀な點で上記住友男所藏の一鏡に雁行し得る作品である。右は最近の舶載に係る二例であるが、其の類として前年の滯米中私の觀たものは十指を屈してなほ餘りがある。それ等は概して小形ではあつたが、圖様や技巧の點ではかへつて上記の様な大形品

を凌駕するものを含み、また時代に於いて遡るべく思惟せらるゝ遺品を見受けてそこに興味が湧いた。紐育のホイット氏(Charles. B. Hoyt)の蒐集品中に見る唐草群雀鏡は前者の例として第一に數へらるべきものである。

ホイット氏の此の鏡は氏が二四年前巴里のビニエー翁(Charles Vignier)の許で見出した逸物で、徑四寸内外の手頃の大きさのもの、鏡自躰は唐鏡通有な白銅から成つていまなほ些かの鏽もなく白光の色澤を放ちそれが極めて厚手の壯重な作りなのが先づ目に着くのに對し、背面は比較的凸凹の少ない貼銀で文様を表はすと云ふ技巧を取つてそこに輕快味を示すもの、而して表はされた圖様たるや、圖版第一に示す如く、完好な素圓鈕から派出した蔓様の流麗な唐鏡文が施轉極まりなき自由さを以て全鏡面を覆ひ、其の先端の化して百有餘の飛雀をなすところ、從來例のない秀抜な意匠と云ふ可く、又此の表はされた群雀には力勁い細彫が加へられて飛動の妙も寫し、鍍金を施して銀臺と相對應せしめ陸離たる光彩を放つて觀者を魅するものがある。蓋しこれを以て唐代の最も優れた古鏡の一と云ふに何人も異議はないであらう。序に記するが此の鏡は山中商會編の『唐宋精華』の米國の部の圖版第五〇にも載つてゐる。但し其の解説には誤つて貼金とある。またそれが薄い板から成るとしてあるが、實物を觀ると其の銀板は普通よりも遙かに厚く、群雀の肉刻りの如きは全く銀から成つてゐる様で、すべてが贅澤な作りである。

同じ紐育のホームズ夫人(Mrs Christian R. Holmes)所藏の貼金葡萄文禽獸鏡は、それが一寸六分五



(大實)鏡文葡萄禽獸金貼

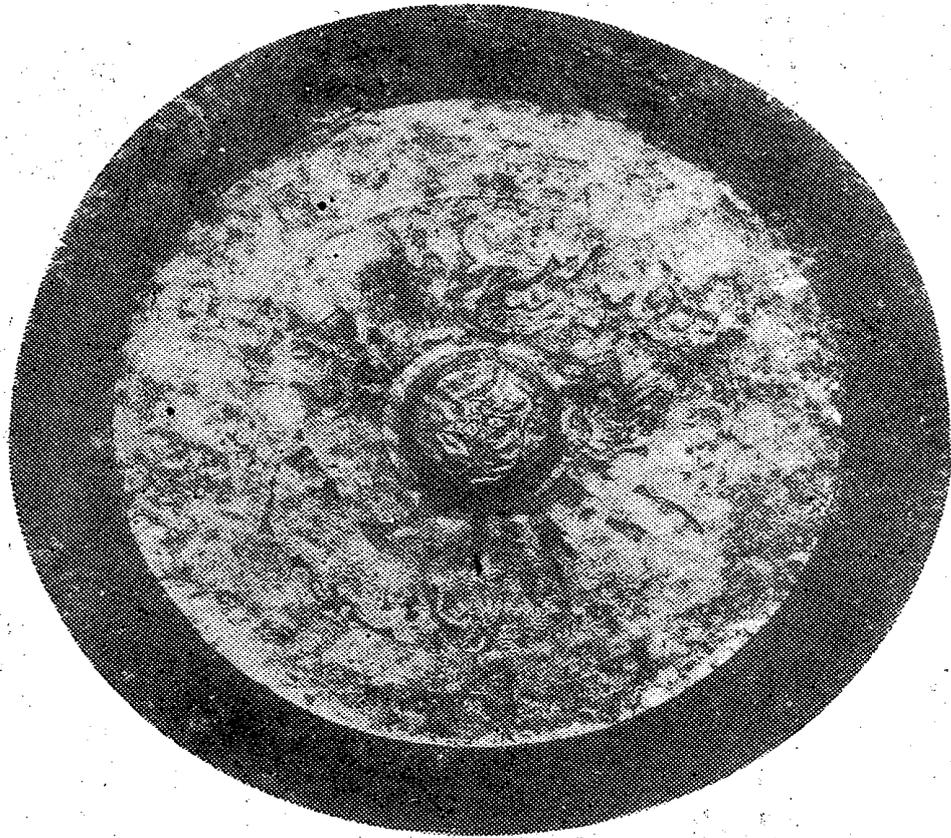
厘の八弧形をして、懷中鏡とも見らるゝ可愛い形のうちに表はされた圖様の鮮かさからまた記すべき遺品である。其の鏡背文は第一圖の寫眞の如く、一段高い外區には施轉した華麗な唐草文を布置してゐるのに對して、内區の主要文は、鈕を繞つた葡萄の蔓文の四方に疾驅する狡狴と靜止した禽鳥とを配して、これ等が細緻の技巧を小さな體上に發揮した點に於いて注意に値するものがある。なほ其の燦然たる黄金色のこれを一層引き立たせてゐるのも記すべきであらう。貼金鏡背ではホームス夫人はまた徑六寸五寸の一例を藏してゐる。これは内區を三帶に分つて各帶葡萄文に種々な禽獸を容れた圖様の複雑なもの、其の狡狴や鳳凰などに唐鏡の特色を備へ、金色また赤いが、打出された如上の圖様が淺くて固より前者の精巧に及ばず、またこれはいま臺鏡から離脱してゐてあまり見榮がしない。

右の類はいづれも其の形式から一見唐鏡たることの明な遺品であるが、上に記した時代の遡ると思惟せられる同式の遺品は、同じホームス夫人所藏の鐵地貼金畫象鏡を以て其の著しいものとする。此の鏡は漢の帝皇の陵から出土したと傳稱せられてゐるもので、其の鏡臺は徑五寸四分を測る、面に軽い反りを持つ扁平型に屬し、保存状態が比較的良好で、背面は鈕を除くと、幅六分の周縁がやゝ高くなつて、

第

二

圖



(大一ノ分二) 鏡 象 畫 金 貼

うちに貼金板のはめ込みに備へた外何等の裝飾も見えず、いま面、縁の所々にもとそれを覆ふたと覺しい布帛片の痕を鏘の間に遺すのみである。處が内區を飾る貼金板は赤味の勝つた良質の金から成つて、其れに圖様を打ち出し一部分透し彫りとした變つたもの。表はされた圖様は侍女侍男を左右にした東王父西王母に配するに長袖の舞女と車馬の畫象とを以てしたもので、漢魏代に盛行した畫象鏡と其の軌を一にし、それを繞つた櫛齒文、波文の兩帶

また彼に見る所に同じく、此の點で上來記した貼金銀鏡とは著しく様子が違つてゐて、臺鏡の示すところと共に著しく古調を帯びたのが注意せられる。

本鏡が漢の帝陵から出たと云ふ傳へは固より直ちに信據し難いものであるし、其の描線また漢魏代の

鏡のそれに比して繊細な感じの多い點から、單に圖様のみから直ちに漢鏡とすることは早計であるが、臺鏡の示す形式を併せ考へると、やはり唐よりは遡つた時代即ち六朝頃の作品と認めて誤りがない様である。もとのメトロポリタン博物館の東洋部長ボシユライト氏(S. C. Bosch Reitz)は同館に藏する相似た圖様の貼銀の一鏡を以て、西紀七世紀代に於ける復古型式の一と説してゐる(Bulletin of The Metropolitan of Art. Vol XX. No 4. 1925)。其の論述から推すと本例また同じ代の模古品かとも考へられるが、然し唐朝初期に果して斯くの如き漢式鏡の模造が行はれたとすることは現在の資料からは容易に認められない上に、氏の復古型とした一鏡は、私見を以てすると近時の模作なるやの疑を挿ましむる遺品で、技巧甚だ拙に、本例とは同一に論じ難いものであるから、いま俄かにそれに據り得ない。果して然りせば本鏡から、唐代以前にすでに貼金を以て鏡背を飾る技巧の存したことが認められなければならぬ。而してこれは鏡鑑背の裝飾沿革の上の一つの新しい事實を示すものである。私は嚮に『佛教美術』誌上で歐洲にある唐鏡の二三を紹介した際、ペリヨ教授より本鏡のことを注意せられたので、併せ録して右の點に論及したが、いまや實物の調査からして、それに一步を進め得たことを欣びとする。これを他の方面からするも、彼の河南省新鄭縣出土の一群のフンドのうちに蟠螭文を打出した二個の圓い金の薄板があつて(一個は北平の地質調査所藏他は瑞典の國立歴史博物館東洋部藏)それが他の物質に貼せられた事を示し、此の種の技術の由來の古く存したことが知られるし、文献の示すところまた『太平御覽』引

く處の『晋東宮舊事』に銀花小鏡、銀華金簿鏡など見え、其の簿と云ふものが今の箔と同義であるから、當代貼金鏡の存在を立證し得るのである(此の項内藤先生の教示に依る)

三

貼金銀背の鏡に比して金銀平脫文鏡が我が正倉院の華麗な遺品から鏡文の示す優れた技巧の一として知られたもの、米國に於ける此の種の遺品は、其のメトロポリタン博物館所藏の銀平脫文の一鏡が、夙に原田淑人氏に依つて『國華』第三十五編 第四册誌上に紹介せられた事であつた。此の鏡は徑一尺に近い大きなものであるところから人目を惹いてゐるが、技巧の點で觀るべきはホームズ夫人の手にある金銀平脫文の一鏡で、これはまた稀に見る原形をよく遺存したもの、従つてそれを舉げて平脫文鏡の代表としよう。

本平脫文鏡は角丸の方形をしたもので、中央での大さ五寸二分餘、縁の厚さ一分餘の佳良な白銅質から成つて面にはなほ白光の色澤を遺存し、其の一隅に齒の長さ一寸六分、幅一寸餘の細長い櫛の迹を黒く印するところ、調度品として墳墓のうちに副葬せられた名残をとゞめるものとして面白い。鏡背は表面の軟かみを帯びた突縁のうちに金銀の平脫文を埋めた式で、其の圖様たる、上面に銀の寶相華様文を飾つた鈕を中央にして繊麗な華文を布置し、(第三圖の(1)参照)四方には前者と相俟つて主文様を形成するところの兩翼を擴げた銀板の鳳凰文があり各個の間に金の花枝を配しなほ空間をうづむるに金鳥、金

蝶を以てしたと圖版第二に見るが如く、其の構圖の均勢は、各々細部をタガネ彫りの線で表はした技巧の精緻と相俟つて、唐代平脫文鏡中に於ける佳品の一なのを物語つてゐる。而して此の鏡の吾々に興ふる興味は右の圖様乃至手法が奈良の正倉院の北倉に藏せられてゐる八花平脫文鏡のそれと全く一致する點に存する。該八花鏡は獻物帳に

八角鏡 一面 重大四斤二兩、徑九寸六分 漆背金銀平脫、緋繩帶

とあるもので、由緒の明な御物の一に屬してゐる。従つて如上の合致から一方御物の右の鏡を支那からの舶載とする見方が有力なる證據を加へるであらうし、他方また、本鏡の製作年代が奈良朝の盛時に相當することも推定せられるわけである。序に記するが本鏡と同じ形の相似た圖様の平脫鏡は私の滯英中一九二八年三月英京倫敦のブルウエット氏(Bruett)の許で一面を見たが、この方は漆の部分の剝落が多く、また修補の痕も處々にあつて、もとより本例の完好に及ばざるものであつた。

同じ平脫文鏡の大形品では山中商會の紐育支店の保管に相近い圖様の一面のあるのをはじめ、華府のフリヤ美術館所藏の一鏡が、徑八寸九分を示し、而も鏡背に畫象文を飾つてゐる點で注意を惹いた。此の后者は金銀板に表はされた處の神人車馬の像が上述のホームス夫人の貼金銀のそれに近く、更に一層優雅の趣を加へた點から興味の多い遺品であるが、たゞ其の埋没した地區が乾燥してゐた爲か背面の裝飾文が脫離を來して、それを面に再び復舊するに當り、殘缺部を補ふに別個のものを以てした形迹があ

り圖様の配布の上に混雜を生じた憾があつて、現在の示す處を以て直ちに本來のものとなし難い。私は遺品の重要性にかんがみて一日餘を費して、仔細の點檢から、其の修補の迹をたどり遂にもその圖様を推察するの域に達し、興趣を覺えたが、事技術の細部に互ることをこゝに説くはあまりに繁雜に流れる

と考へるから、

別の機會に譲る

ことにして、い

まはたゞ(第三

圖の(2)に)其の

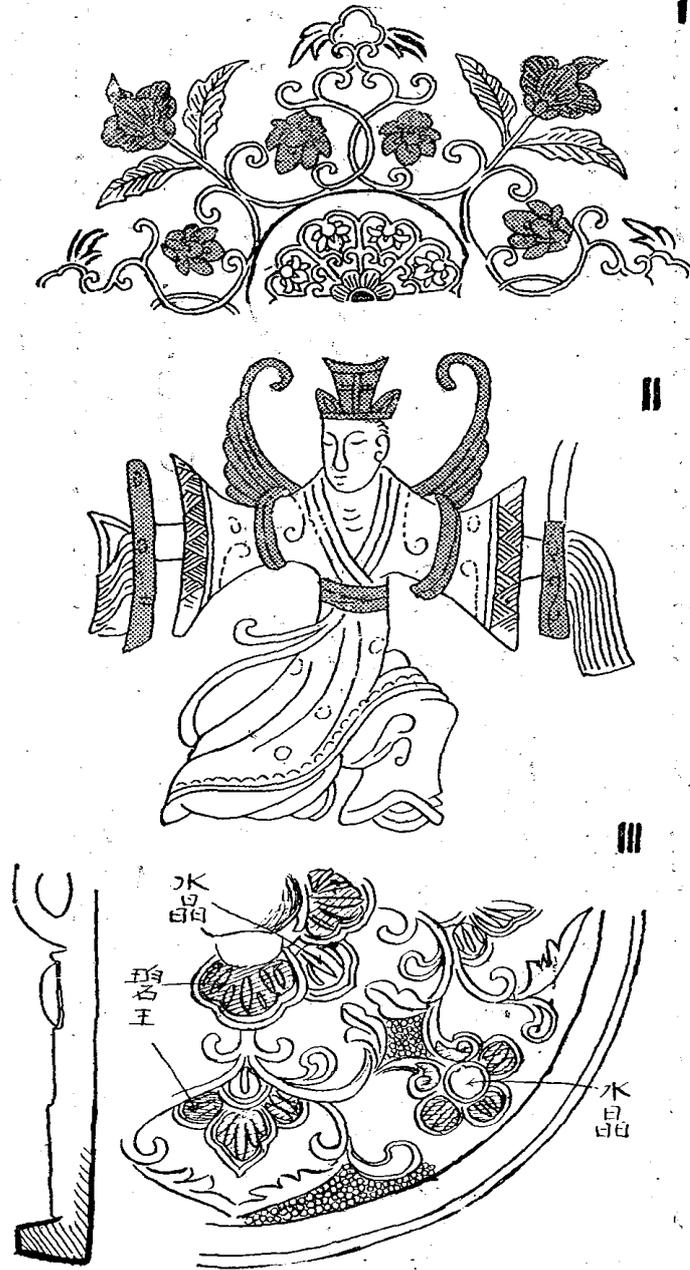
主畫像の一であ

る舞女の見取圖

を載せて其の優

れた手法の一端

第 三 圖



各種古鏡細部測圖(大實)

を傳へるにとゞめる。フリヤ美術館主任のロツヂ博士はこの鏡を以て六朝代の遺品とせられてゐる。果して然らば平脫文鏡また唐以前に其の存在が認められるわけである。貼金銀鏡の場合と同じく金銀平脫文の技巧の既に漢の盛時に存した事は朝鮮樂浪郡の遺跡出土の漆器(大正十三年秩發掘丙墳出土の鏡奩)

や北蒙古ノインウラ山古墳の同じ遺品(第一號古墳出土の漆奩の蓋)等から確められる。文献からも魏武帝即ち曹操の上雜物疏に金錯銀錯鏡なる名見えて其の存在を物語つてゐる。従て右の推定は必ずしも驚くには當らないであらう。

平脱文の手法と關連した鏡背文のうちに美しい石材を嵌入した唐鏡としては、嚮に私の『佛教美術』に書いた巴里蘆氏保管の一鏡が、其の後米のブリス大使(His Ex. Robert Wood Bliss)の有に歸して此の掬す可き小鏡を再び紐育のメトロポリタン博物館で觀るの欣びを得たのを記すべきであるが、更に相似た技巧の一例を同じ紐育のムーア夫人(Mrs Moore)の蒐集品中に見出して此の種の珍らしい類例を加へたことであつた。此のムーア夫人の藏鏡また前者に似て徑二寸三分五厘の小形であり、久しく土中に埋没した爲に、鏡背は鏽で覆はれてあまり見榮のしない遺品ではあるが、圖様は全面に鍍金が施されて、それが縁の白銅色と對照の妙をなすことが先づ目にとまるのであり、更に一種の忍苳唐草様華文のうちゼスパイに美しい碧玉の外に水晶を嵌入した點が此の鏡を特色づけてゐる。右の特徴を持つ鏡背は第三圖の(3)に示す四分の一の測圖で明であるが、いまそれに簡單な解説を加へると、小形の鈕の周圍に一種の花形座が作り出されてゐて、其の主な四花瓣に碧玉が加へられ、水晶の嵌め込みは復瓣とも見るべき他の四瓣に施されたのを記す可く、構圖の主要部をなす内區の忍苳様華文は、其の前から派出して全區を四分し其の肉を持った線は雄勁と華麗とを併せ示し、文様間にある花形と前者のうちに同じく碧玉と水晶と

の嵌入を以てし、別に梨地で空間が埋められてある。相似た圖様の鏡としては奈良の東大寺大佛殿の臺下から出た一例を挙げ得るが、これはそれよりも遙かに立派なもので、其の美石の鑲め方はブリス大使の藏鏡とまた趣が違つて珍らしい。時代は唐の盛時と考へて誤りがなからう。

四

以上の諸例に比べると、鏡背にそれを飾る文様を鑄出した類は、漢鏡以來の傳統の式として其の數が多いのは云ふまでもなく、この中にまたとりくに興味を惹く遺品がある。尤も此の類では我が正倉院御物に見る様なすばらしい立派なものとしては、いま土耳其君府の博物館に藏するパレストイン發見の一鏡が徑二尺を超ゆる海外に於ける唯一の實例であるのを除くと、歐米ともに遂に尺餘の遺品を見出し得ず、たゞボストン博物館所藏の支那四川省出土の葡萄鏡が其の大きさの點からし、また作行きのあざやかさに於いて最も見る可きものなのを注意した位に過ぎない。やはり最も多いのは徑五六寸の鏡として手頃な類であつて、圖様の面白いものもそのうちに見受けられた。

はじめに記した如く唐鏡背文の特色の一つは其の圖様の寫實的となり繪畫的な意味の加はつた點に存してゐる。即ち圖の配布が傳統的に左右均勢なる法則の支配を受けながら、其の圓乃至方形の面が一の畫面として表はされたところに繪畫とも見られる類の多いのが人のよく知る處なのである。さて此の類

第 四 圖



白牙彈琴八花鏡拓影

で、亞米利加に於いて觀た著しいものを數へると、最も多い双鳳鏡、狻猊鏡等の外に、嫦娥の月に走る故事を表はした月桂鏡、狩獵の光景を描き出した鏡、さては伯牙彈琴鏡、海磯鏡の類がある。我が邦に類例の乏しくない月桂鏡はメトロポリタン博物館に一面、フリヤ美術館に二面を藏する外にスプリングフィールド市のビッドウェル氏(Raymond A. Bidwell)收藏の一例が、圓い鏡背の全面にそれが表はされて、兎と蛙との寫實的な表現は鑄上りの、鮮かさど相俟つて佳品の一に加ふ可きもの、狩獵文鏡はメトロポリタン博物館とフリヤ美術館とに各一面を藏して、共に同形式として、特徴のあるもの、但しこれは既に他で紹介したから今は再記を避けよう。(拙稿「歐米で觀た狩獵文鏡」考古學雜誌第二十卷第三號所載參照) 伯林彈

琴鏡また其の小形なものは支那の圖錄に散見し、實例も少くないが、紐育で見たギャラトリー翁(Mr. Gallaty)所藏の一鏡は第四圖に示す如く八花形をした徑七寸

一分餘のもので、其の鑄上りの精妙と外帯に隸書の銘を持つところ、稀に觀る佳品として、同式鏡中我が法隆寺傳來の遺品に雁行し得るものと云ひ得よう。其の色澤また美しい白光の間に群青と緑との鏽を點じて古色の掬す可きものがある。所謂海磯鏡式の類は私の見たもの同じく我が法隆寺傳來品にある様な大形品ではないが、中でビッドウエル氏所藏の一例は突縁などの設けなく、背面全體圖様を以て埋め



竹林双虎八花鏡拓影

ると云ふ大膽な行き方のものであつて、重疊せる山岳に海波を配し、うちに箏を吹く神仙と鳳凰とを對比せしめた點を面白く思つた。アメリカではないが倫敦で見た海磯鏡の一に、方形な鏡で縁を略して同じ行き方をしたものゝあつたことをこゝに附記しよう。唐朝になると一部にこんな構圖が行はれたと見ゆる。

以上の外圖様の上から珍らしく思つた品にはなほホイット氏の蒐集鏡中の双虎鏡とポストン博物館の仙人畫象鏡の二者

がある。前者は徑七寸三分五厘の八花形をしたもので、内外圈の區別などなく、素鈕の上下に山岳形に飛雲を配し、左右に寫實的な双虎を肉刻で表はして竹樹を添へた處、均衡を保つた配布ではあるが、鎌倉時代の倭鏡にある相似た圖様を想起せしめるもの（第五圖參照）。其の后者は蓮花座鈕の一方に臥牛と二個の人物を寫し、他方には窟内に居する人物とそれに赴く人物を描き、下方に四仙の圍碁の圖がある。全面繪畫化し、表現の平面となつたものと相俟つて、時代の後唐に屬し宋鏡への過渡形式を示してゐる點に興味がある。（八月十五日稿）

梅原末治